

哲学的因果論と個別科学の接点

松王政浩（北海道大学）

哲学（科学哲学）的な因果論と個別科学における因果性の判断は、一部物理学分野での議論を除いて、長らく明確な接点を持たないまま発展してきた。概ね、哲学における因果性の議論は、因果そのものの厳密な条件付けを焦点としてきたのに対し、科学は分野毎の前提に含まれる暗黙の因果性の上に、個々の議論を成り立たせてきたと思われる。しかし近年、特に統計的因果推論（ベイジアンネットワーク）が哲学的議論の中で注目されるようになったことを一つのきっかけとして、両者の議論は次第に距離を縮めつつあるように見える。たとえば、いわゆる SGS の統計的因果推論は、比較的初期の頃から、社会科学分野の因果推論への適用を念頭に議論がなされてきたし、また、F. Russo, J. Williamson らは、こうした最近の統計的因果推論のみならず、プロセス理論を含む機械論的因果推論等も含め、広く哲学的な因果論を個別科学の因果的推論に組み込む必要があるとして、科学者との協働を進めようとしている。

本企画は、このような最近の流れに沿い、科学哲学的因果論と個別科学における因果性判断との接点を考える上で手がかりとなりそうな具体的事例を紹介し、参加者とともに、今後のこうした議論の発展可能性について考えようとするものである。ワークショップでの提題の仕方は基本的に各提題者に任せてあるが、いずれも個別科学を起点として議論することになっており、提題に際しては次の2点を含めるようお願いしてある。

- i) 各自の取り上げる個別科学において因果性（の判断）がどのように織り込まれているかを、特徴的な事例を通して可能な限り明らかにする
- ii) この事例分析から、因果性をめぐって、科学哲学的な議論と接点があるとするばどこにあるか、またギャップがあるとすればそれを埋める必要性や可能性があるかどうかについて論じる

個別科学を起点とするため、提題者ごとに取り上げる科学哲学上の話題は、それぞれ異なり、場合によっては発表者間での議論の噛み合わせが難しいかもしれないが、参加者との議論を通じて、できるだけ個々の科学ごとに接点の議論が深められればと考えている。提題者の発表内容については、各要旨でご確認いただきたい。